

## 陸上自衛隊員の孤立者救出活動

十勝の大地を暴れ狂った記録的な集中豪雨、鹿追の母なる川「然別川」のはんらん、ゴーゴーとうなりをあげる濁流は町内の半大を狂流した。

町民のだれもが経験した事のない未曾有の豪雨の中で、一人の犠牲者もでなかった事は、不幸中の幸いと言えよう。

その陰には、陸上自衛隊鹿追駐屯地（寺野一行司令）隊員の決死の救助活動と、土砂崩れで道路を断たれ、然別峡「ホテルかんの」に閉じ込められた宿泊客や従業員をヘリコプターで救出した陸上自衛隊第5飛行隊（譲葉佐敏隊長）の活躍があった。



濁流の中、ゴムボートで救出に向かう陸上自衛隊鹿追駐屯地隊員（十勝毎日新聞社撮影）

前ページ写真は、西瓜幕西30線27号の然別川右岸で決壊寸前個所の盛土作業をしていた作業員が、突然の河岸決壊により中州に取り残されたため、鹿追駐とん地隊員が救助に向かうときのものですが、これを現地取材した十勝毎日新聞社の杉山謙二地方部記者は「22—2121この一年」で次のように語っている。

——川はもともと右にカーブを描いている。これを曲がり切れず、一直線にあふれ出したものらしいが、初めに行った地点はその下流。とてもここからの救出は不可能だった。それよりも水が正面からまともに迫り、こちらの足もとが危うくなつて、救助隊が後退を開始。これに続こうとしたが、目の前で水が先回りをし、砂利道を半分削り取つた。「頼む」とハンドルにすがり、アクセルを踏んだが車は流れの中央で急に速度を失い、止まる寸前。「動け動け」と念仏のようにとなえ全身に冷や汗が。

救助隊は大きくう回して決壊個所の上側に回つた。懲りずに後を追い、ゴムボートによる救出作戦の最先端でずぶぬれになり、夢中でシャッターを押した。「まったくどういう連中だ」。隊員たちは大木をなぎ倒す濁流の中に木の葉のようなボート一枚で、のまれるように突っ込んで行つた。

雨にかすんだ向こうからボートが引き返して来るのが確認された。「やつた」——

# 鹿追 ホテル宿泊客ら11人救出



生後6ヶ月の智子ちゃんを背にヘリを降りる泉田幸子さん



土砂と流木で埋まつた「ホテルかん」の体  
状=6日、宿泊客の泉一哉さん撮影

十勝の大雪を暴れ狂つた記録的な集中豪雨。その悪夢から二日目の七日午後、大相撲な土砂崩れで道路を断られ、鹿追町然別峠の「ホテルかん」に閉じ込められた21人のうち宿泊客20人と重傷を負ったホテル関係者一人が陸上自衛隊第五飛行隊のヘリコプターで無事救助された。その隙には宿泊客や家族らの安否を氣づかい、「決死の登山」を決行したホテル経営者の勇敢なエピソードもあった。一方、新得町トムラウシで孤立していいた地域住民約三百人も無事に難を逃れた。しかし、豪雨のツメ跡は西部十勝を中心に各地に広がっており、中でも上士幌町では前夜水道本管が管更川の増水で流失、始水不能の状態で交通網も至るところですでに断されているが、レール下を走ぐられ、木道となつていた国鉄室蘭本線御影・上野間は7日夕までに復旧した。

## 陰に経営者らの「決死の行動

# 豪雨のシメ跡依然深く 一日ぶりに「ヘリ」で

## 鉄砲水の中夢中で

ホテル  
関係者  
一人ロツ骨骨折

【鹿追】豪雨泥濘「ホテルかん」を襲う。宿泊客ら20人が救助され、重傷を負った。宿泊場所は、南側の駐車場は泥濘に陥り、車も、自家発電機も壊滅的損傷。この「予期せぬ出来事」に遭遇

町の岡村ハツ子さん(左)と玉井一郎さん(右)。そこに救助員や自衛隊員の救助隊が来ていた。「助かるだよ」と声をかけた。泉田幸子さん(左)の妻アキ子さん(右)は、豪雨の影響で腰痛が悪化した。母の智子ちゃん(生後6ヶ月)は、腰アキ子さん(右)に付いて来て、このため現地に立派な娘だつた。

「北海道八月豪雨災害対策十

勝地方本部」が八日午前九時現

在でまとめた豪雨の被害はその

後増え十三市町村で床上浸水

百三十一棟、四百四十世帯の

十六棟、二千一百三十七棟、四百六

十五世帯、被災者數千五百九十

八人にのぼった。



【鹿追】豪雨で孤立していた「  
川郡新得町東大雪、トムラウシ温泉  
宿泊客、旅館従業員含む21人を救出  
した。】

「  
立  
ホ  
テ  
ル  
客  
ら  
救  
出